

# タイの民主化に貢献した 悲運の政治家プリーデー・パノムヨン

高橋 勝幸

プリーデー・パノムヨン（一九〇〇〜八三）は一九四七年一月のクーデタにより失脚して中国に亡命し、フランスで客死した。

彼は一九三二年立憲革命の設計者、タマサート大学創立者、不平等条約を改正した外相（一九三五〜三八）、摂政（一九四一〜四五）として影響力をもった文民政治家である。ピブーン政権（一九三八〜四四）が第二次大戦において日本と同盟を結び、英米に宣戦布告する一方、プリーデー摂政は抗日自由タイ運動を指導し、連合国と協力した。戦後、プリーデー摂政は宣戦布告の無効を宣言し、国連への加盟を成し遂げた。一九四七年クーデタまでの戦後の混乱期、プリーデー派が政権を握り、難しい舵を取った。プリーデー自身も短期間であるが、首相（一九四六年三月〜八月）を務めた。

彼は民主党を始めとする王党派と陸軍を敵に回し、タイにいられなくなった。

## ●クーデタによる失脚

一九四七年一月八日、ピン・チュンハワン陸軍中將ら退役軍人が中心となってクーデタを起こし、プリーデー派政権を打倒した。クーデタによる政権交代は一九三三年以来初めてのことであった。以後、クーデタが政権奪取のために繰り返された。このクーデタは陸軍を復権させた。陸軍が民主党と組んで民主主義を装い、また国王怪死を巧みに利用したことがクーデタの正当化に役立った。国民の多くがクーデタを歓迎した [Macdonald 1950, 164]。このクーデタを成功させたグループ（クーデタ・グループ）が第二期ピブーン政権（一九四八〜五七）

終焉まで重要な政治的役割を担った。

クーデタに至った要因はプリーデー派政権の失政の他に三つあげることができよう。第一に、プリーデー派と王党派の対立である。王党派は一九四六年四月民主党を創設して、立憲革命の理論的指導者であったプリーデーを攻撃し、プリーデー派政権の社会民主主義的政策からかれらの既得権益を守ることに努めた。一九四七年五月、民主党はプリーデー派のタムロン内閣に不信任案を提出し、治安、インフレ、物資不足、汚職、国王怪死事件に対する無策を糾弾した。その模様は一週間にわたってラジオで中継された。不信任案は否決されたが、内閣は退陣し、再びタムロン首相が新内閣を発足させた。不信任動議は政権交代への道筋をつけた [村嶋 一

九八七、一四二〜一四四]。

第二に、プリーデー派と陸軍との険悪な関係である。ピブーンが一九四四年七月に首相を辞職すると、プリーデーはクワン・アパイウォン（後の民主党首）を首相に推挙した。クワン政権（一九四四〜四五）中、ピブーン派の将校が次々に解任された。戦後の陸軍は、協力した日本が敗戦国となり、宣戦布告したイギリス・米國が戦勝国となったために権威と信用を失った。ビルマ・シャン州に出征した陸軍は政府に見捨てられ、自力で帰国した。連合国と協力し抗日運動を展開したプリーデー派が政権を掌握し陸軍を軽んじる態度に、陸軍は屈辱を味わった。戦犯容疑者の逮捕もまた陸軍の不満を高めた。さらに政府は軍部を縮小した。冷遇された陸軍の一部がプリーデー派に反対する民主党と結託し、クーデタを実行することになった [「スターチャイ 一九九一、六六〜七四」]。第三に、プリーデーが首相在任中に起きた八世王（現国王の兄）の怪死事件である。八世王は寢室で自分の銃の弾に額を貫かれて死去した。その拳銃は、戦後八世王自身がプリーデーに頼んで自由

タイの秘密キャンプを見学し、元OSS（米・戦略情報局）のメンバーから贈られたものだった

[Macdonald 1950, 51-53]。警察はその原因を事故と発表した。プリーデーは国王死去の責任をとって首相を辞任したが、再任された。八世王の怪死はプリーデーの政敵に好機を与えた。プリーデーを排除するために、民主党は人を雇って、映画館で「プリーデーが国王を殺した」と叫ばせた。国王は殺害されたとの風聞が広まった。プリーデー内閣は事件を究明するための調査委員会を設置して、事態をうやむやにした。真実が明らかにされれば、

政治に混乱を来す恐れがあったからである「ナッタポン 二〇〇九、五七」。

### ●プリーデーの反撃

一九四七年一月八日クータ当日、軍人がプリーデーの自宅に侵入し、国王暗殺の容疑で彼を殺害しようとした。プリーデーは逃亡に成功して海軍基地に身を隠し、イギリスおよび米国大使館付海軍武官の助けでシンガポールに潜行した。しかし、イギリスと米国は、プリーデーらによる

クータ・グループへの反撃には協力しなかった。プリーデーはイギリス側の意を汲んで、一月末シンガポールからラジオ放送で、プリーデー派（自由タイ）がクータ・グループに対して武力行使することに反対を一旦表明した。またプリーデーの亡命政府樹立の望みは、期待していた米国の援助が得られず実現しなかった。米国は冷戦のなか、フランスを支援していた。プリーデー派の政権の社会主義的志向、フランスとの領土問題、仏領インドシナの独立運動支援、東南アジア連盟結成の動きから、米国はプリーデーを見限った。

シンガポールで帰国できる日を待つこと七カ月、プリーデーは仲間の一部がクータを準備したことを知ったが、まだ時間がかかりそうだった。そこで、一九四八年五月香港を経て上海に向かった。プリーデーはサンフランシスコを経由して、許可の取れたメキシコに亡命しようとしたところ、駐英米国大使館が発行したビザを駐上海米国副領事（CIA）に無効にされた。それを知った蒋介石は、戦中の抗日協力の誼みで、プリーデーに中国滞在を勧めた

「プリーデー 一九八六、一〇四一—一」。

一九四八年一〇月一日、陸軍参謀によるクータの企てが失敗した。これを契機に、プリーデー派も政権奪回の動きを速めた。ピブーンに戦中の恨みがある中国国民党もプリーデーの帰国を助けた。一九四九年二月プリーデーは広東からバンコクに潜入した。プリーデー派はサリット陸軍少将を仲間に取り込み陸軍の力を借りようとしたが、うまくいかなかった「ソーラサック 二〇一二、三四九—三五〇」。プリーデー派は海軍の支援を得て、二月二六日にクータを決行し、王宮を占拠した。しかし、反乱はまもなく陸軍に制圧された。クータ失敗の結果、プリーデーは在タイ華人や中国共産党の力を借りて、解放されてまもない北京に逃亡した「プリーデー 一九八六、一〇四一—一三二」。プリーデーが中国を亡命先に選んだのは、彼の中国に対する強い関心、在タイ華人の協力、中国共産党の受け入れがあったからだと考えられる。以後、プリーデーは二度とタイの地を踏むことはなかった。

### ●中国亡命とかな望み

元OSS長官のドノヴァンが駐タイ・米国大使（一九五三—五四）に就任すると、一九五四年反共心理戦争を展開し、その中心に王制を置いた「ナッタポン 二〇〇九、一五〇」。タイ国内では、プリーデーが雲南で人を集めて政権を奪還しようと企てているとの噂が広まっていた。プリーデーが中国に避難していることを公表してまもない一九五五年二月、八世王殺害の犯人として、裁判で無実を最後まで主張した三人の侍従が処刑された「ドゥツサデー 二〇一二、一三七」。

一九五五年四月外相のワン親王がバンドン会議に参加し、周恩来首相と会見する機会を得た。そこで中国がプリーデーの政治活動を支援していないこと、タイ族自治州のタイへの拡大がないことが確認された。これを機に、ピブーン政権は緊密であった米国から距離を置き、中国との関係改善を試みた。加えて、王党派に対抗するために、プリーデーを帰国させ、国王怪死事件を蒸し返そうとした。これに呼応して一九五六年四月、プリーデーはピブーンに書簡を送り、自身が八世王死去と関

係のないことを主張し、仏暦二五〇〇年（一九五七）を記念して政治犯と潜行者全員に恩赦を与えるよう要請した。ピブーン首相の対応は前向きだった。実際、プリーディーの長男を含む反政府運動家が釈放された。米国はピブーン政権が反共政策を緩め始めたことに不服であった。サリット陸軍司令官はプリーディーの帰国に反対して王党派と民主党から支援を得た「ナッタポン 二〇〇九、一六六一―二二二」。

一九五七年八月、ピブーンはプリーディーのもとに二人の弁護士を送り、国王怪死事件について話し合わせた。弁護士が帰国してまもない九月、サリットがクーデタを起し、ピブーンは日本に亡命した。その後も、広州に住むプリーディーと日本に住むピブーンとの連絡は続いた。この活動は、両人にタイ中関係改善を期待していた中国政府も承知のことだった。一九六三年一月サリット首相が在任中に病死した。サリット死後の動静を見守っていたところ、ピブーンが一九六四年六月急死したので、両者の会談と帰国の夢は実現しなかった「ルンマニー 二〇一一、二五四―二五八」。

● 静かな晩年

中国では、プリーディーは世界情勢やタイの国内ニュースを追い、中国事情に関心をもって各地を視察し、理論と実際の研究に余念が無かった。周恩来首相はプリーディーに宛てた一九六六年の年賀状のなかで、タイ共産党の反米愛国武装闘争の開始に触れ、プリーディーに新たな貢献を期待した。プリーディーは中国で活動するタイ共産党幹部と接触しているが、同党が中国共産党の言いなりになっていることに不満であった。一九七〇年代、タイ共産党はプリーディーを修正主義者と非難した「ドゥツサディー 二〇一一、一〇二、一一九」。

文化大革命期の中国は鎖国のような状態で、自由が制限されていた。七〇歳を迎えようとするプリーディーは親族や友人との交流を望んだ。そこで、周恩来の気遣いとフランスの助力により、プリーディーは一九七〇年不自由な中国から、一九二〇年代に留学したパリへ移住した。親族、友人やタイ人留学生と交流する他は、彼は研究・執筆活動に専念した。国王怪死をめぐるプリーディーに擦り付けられた容疑の潔白を証明

することに多くの時間が費やされた。タイ国内には、プリーディーが健在である限り、タイ政治の安定は保障されないとの見方があり、彼は客死せざるをえなかった。現在、タックシン元首相の亡命がプリーディーと比較され、しばしば取沙汰される。いずれも選挙を通して選ばれた政権がクーデタにより打倒され、その結果、失脚し、帰国と政界復帰のための運動が国会の外で展開されている。敵は共通して民主党であり、王制と深く関わっていることは興味深い。いかなる理由であれ、クーデタによる政権交代が国民に重い負担を強いることは否定できない。

（たかはし かつゆき／ナレーズワ ン大学人文学部講師）

《参考文献》

① 高橋勝幸「二〇一一『冷戦初期の「平和運動」…タイ共産党の統一戦線活動と大衆参加』早稲田大学出版部。

② 村嶋英治「一九八七」「タイにおける政治体制の周期的転換」萩原宜之／村嶋英治編『ASEAN諸国の政治体制』アジア経済研究所、一三五―一九

〇ページ。

③ Macdonald, Alexander 1950. *Bangkok Editor*, New York: The Macmillan Company, 1950.

「タイ語」

● スターチャイ・イムプラサート「一九九二」「タイ国家争奪計画」バンコク・サマーパン。

● ソーラサック・ガームカジョーンケンキット「二〇一一」「自由タイ」バンコク・チュラーロンコーン大学アジア研究所。

● ドゥツサディー・パノムヨン「二〇一一」「プリーディー・パノムヨンと21年間の中国生活」バンコク・マティチョン。

● ナッタポン・チャイジン「二〇〇九」「アメリカの世界秩序下のピブーン政権時代のタイ政治（一九四八―一九五七）」チュラーロンコーン大学政治学研究科提出博士論文。

● プリーディー・パノムヨン著「一九八六」ポーンティップ・トーヤイ他訳『激動の人生と21年間の中国亡命生活』バンコク・ティエンワン。

● ルンマニー・メーカソーポーン「二〇一一」「権力」バンコク・バーンプラアーツィット。